
夏の月

銀狼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夏の月

【Zコード】

Z5845D

【作者名】

銀狼

【あらすじ】

ある日主人公は幽霊にとりつかれてしまった。しかし、その幽霊とちょっとしたことで喧嘩して結局別れてしまう。でもその出会いは大切なものだった

七月になつたばっかでもう暑さがたまらない
今日このじゆ

大村カズキ（15） 今日 幽霊にとりつかれました！

「まあいいじゃん。人生いろいろだし」

そう幽霊は言つた。

そう こんな脳天氣そうな少女にとりつかれたのだ

今日の朝、俺はたまたま早く学校へ向かつた
その途中見てしまつたのだ 彼女を
とても苦しそうだつた。幽霊という存在を初めて
この田で見たので、凍りついたかのようにじつと
彼女を見つめていた。すると彼女が振り向き、
目が合つてしまつた。

すると

「お・・お腹空いた・・」

そう喋つた彼女はふわふわと近づいて來た

気が付くと俺は公園のベンチに座つていた
訳も分からぬまま周りを見わたすと横に
空のお菓子がたっぷり入つたコンビニの袋
があつた。その横に少女が満足そうな顔を
して座つていた。

「いや～お腹いっぱい。君のこと氣に入つたよ
しばりくとつつかせてもううね～」

こんな馬鹿げた朝だったのだ

ああ、俺はこいつにとりつかれたまま

今日も学校だあ・・ああ

こんなアクシデントがあつたにも関わらず

俺は余裕な時間で学校に登校した

「へーこれが君の学校かあ~」

彼女は興味津々で学校を見ていた

「どこにだってある普通の学校だよ

俺はそう冷たく返した

「あれ?女子水泳部が朝練やつてるよ~
ちょっと見てこよ~」

そう言って全速力で行ってしまった

「お前は健全な男子高生か
となんかツッコンでしまった

「おはよう、カズキ

同級生の友達が挨拶をした

「おはよう

と返した

「なあ、知ってるか?昨日隣町で女の子が

自殺したんだつてよ。しかも俺らと同じ位

の歳の~」

「マジで？ なんで自殺したんだ？」

そう俺は聞き返した

「さあ、それは知らないけどな・・相当辛い事があつたんじゃないの？」

実は俺はこの問題についてすごい疑問を持っていた。

80歳くらいになつて寿命で死んでしまうだらつなあと考えていた俺にとつて死ぬなんてすつごく先の話。つまり俺にとつて今は死という事と無関係な日々を送つてている。それが今 自殺 という形で俺と同じ位の歳の人がたくさん死んでいる。

どうしてなのだろう

何でそれをする決心ができるんだらつ

そんなことが疑問だつた

「いやー 朝練頑張つてたよー」

彼女が戻ってきた

「あ

丁度 死 という事実に直面した者が

ここにいる

丁度いい ちょっと聞いてみるか

俺としても少し心を開いたのか
やつとまともに彼女の顔を見た

「・・・・・」

言葉を失つてしまつた

彼女は足さえあれば

そこらへんにいる人と同じであり、
表情も一度は死んだとは思えない
ほど明るい笑顔でいた

その笑顔には懐かしさに似た
やすらぎを覚えた

そして例のことを聞いてみた

「なあ・・・お前つてどう死んだの?」

「え?」

少し時が止まつた

「それがね、全然覚えてないんだよ」
その言葉と彼女の笑顔で少し重かつた
空気が一気になくなつた

「なんだよそれ・・・」

そう返した俺は 少しほつとしていた
聞いちやいけない事のよつな気がして
聞いた時に少し後悔したんだ

毎日絵柄を変える空

授業中につい見てしまつそれを見て

今日はいつも特別なんだという気分になる

なんか今日の俺 ダサかつたな

偏見で人（幽霊だけど）をみて嫌悪してしまつた

それを1回取り扱つてみたらなんか

これからもやつていける気がした

新しい友達ができた そんな感じに思えた

そう考えながら空を見ていると

「大村 こここの問題やつてみる」

問題をあてられてしまった・・

「えつと 福沢諭吉です・・」

クラスのみんなに笑われてしまつた
今は数学の時間だつた

それから一週間は諭吉先生とあだ名
で呼ばれつづけた・・

そうだったなあ これがあいつとの出会いだつた
衝撃的な日だつたから今でもまるで記憶という
フィルムを巻き戻してみてるかのように鮮明に
覚えている。

その衝撃的な出会いから数日後
俺は同じクラスの女の子から
ラブレターをもらつた

「ヒュー モテルねえ カズ君」

俺と幽霊の女の子とはすっかり仲良くなつた
そしてどうしてもカズ君と呼びたいらしく
ちょっと恥かしいながらもそう呼ばせていた

「で付き合つちゃうわけ?」

「…どうしようかな」

「え? 何で?」

「それは…秘密ってことにしてく

「つまんないの~」

実は俺は一年前にここに引っ越してきて
引っ越す前の学校に好きな人がいたんだ
だけど告白できずに引っ越しちゃって…
でも俺は諦めない

一年間告白できなかつたことを後悔していた
もうすぐ夏休みになる。だから俺はもう一度
そこへ行って告白しようと思つている
だから断ろうとは思つていいのだけど…俺が
告白できなかつたのをいい例として告白をする
ということはもの凄く勇気がいるのだ
それに俺が好きな子に振られた時のことを考える
だけでものすごく悲しい気持ちになる
だから…断りにくいな…

俺自身 告白してきた女の子が嫌いな訳ではない
むしろ逆の方なんだ 一緒にいて楽しいし

だから悲しませたくないし後々関係が気まずくなるのも嫌だ

今ままの関係でいたい

そんな気分だつた

でも告白された以上そんなことはできない

家に帰つてすぐベッド横になつてのことを考えた

「まだ考へてたの？」

「ああ・・・」

俺は適当に返事をした

部屋は静かだつた

「せういえはあ・・・

ふと聞いてみた

「なあ「」

「お前・・いつもなら 付き合つひやいなよー！
とかいこやうなのんにせけに黙つてるな」

そう 彼女は元気いっぱいで普段は
少し静かにしろ といいたくなるくらいだつた

「だつて・・私がとやかく言つてじやないじやない」

確かにその通りであつた

だけど彼女が少し機嫌悪そなのが分かつた
もう恋愛などできない彼女にとつて青春を満喫
してゐ俺に嫉妬心でも抱いてゐるのだろうか

そしてまた静寂な空氣に満たされた

そして俺がふと口に出した

「付き合ひつけや・・おうかな」

「え？」

彼女はいきなりそう言われて驚いていたようだった

「なんで 付き合つ気になつたの？
さつきまであんなに悩んでたのに」

そこで俺は本当の事を言つた

「実はさあここに引っ越して来る前の所に
好きな人がいたんだ。それで俺はまだ好き
だから断ろうと思つたんだけど・・
でもさ 実際今告白しても離れ離れなのは
変らない。会えないのは辛いし」

「その好きな人って・・どんな人だつたの？」

「そうだなあ 天然でドジばっかで転んでばっか
だつたなあ。でもどんなに失敗しても諦めないで
太陽みたいに眩しい笑顔をしていたよ」

「ふう〜ん そなんだ

・・今まで本当に好きなんだね」

「な なんでそつなるんだよ」

「だつて・・その子の話をしている時
ものか」
「樂しそうな顔してる」

「そつなのがもな・・

でも気持ちに見切りもついたんだ
離れ離れになつた時点で場所だけじゃなく
心も遠くなるんだと思う

俺があいつのことを話すのも昔のよう
今想つてゐる気持ちで話してゐるんじやなくて
もう思い出を話してゐる感じなんだ
だからもうあいつのことは振り切つて
新しい道を歩こうと思つ

「そんなの・・ダメだよ
自分にウソつこぢや・・ダメだよ」

彼女は真剣な顔をしていた

「離れ離れになつたつて・・
またいつしょになればいいじやん」

「決めたんだ・・

「そんなことして、本当に満足なの?」

「決めたんだ・・

「今でもまだ好きなんでしょう！？」

「もういいだろ！！お前には関係ない！！
俺が決めしたことなんだ！！
もうどつかに行けよ！……！」

「

彼女は何か言っていた
だが興奮しすぎたのか泣いていて
何を言ったのか分からなかつた
そしてそのまま何処かへ行つてしまつた

次の日 俺は告白してきた女の子に返事をした
数日間俺にとりついてきた幽霊はいなかつた
少しいいすぎたかな・・少し気になつたけど
期末テストが近づいてきてその忙しさで
彼女のことを忘れてしまつた

そして夏休みになつた

暗い闇の中にある光は希望がたつぱり
つまつていそうだよね
でもそれを見ている俺自身はその光の
周りにたくさんある闇の一部なんだ

その光を作ったのは俺なのに
願いをこめすぎて光を作ったから
疲れたのかな

それとも

今の俺の心は光の無い闇
とても乾いた砂漠のよう

だから眩しすぎる光を見ると自分が
みじめになる

だから少しの光でカラカラに乾いた砂漠
を少しずつ潤そうとしているのだろうか

光には不思議な力があるからね

すこしづつだけど確かな力

俺は引越し前の場所へ行つた

まあ婆ちゃん家があるから墓参りとか
そういうのをしなきゃいけなかつたし

そして俺は友達と会つた

「久しぶり！」
「おー！久しぶり！」

こんなベタな挨拶をして俺らは話しこんだ

たつた16年しか生きていなきけど
忘れていたり覚えていたり

昔の思い出という物はたくさんあつた

「あつたあつたーーー！」

といつ言葉を何回言つただろうか

そしてふと好きだったあの子のことが脳裏
に宿つた

そういえば・・

俺は結局告白してきた子と付き合つようになり
自分としてはふつきれたつもりでいた

だが やっぱり気になつた

「なあ・・美雪 ビうしてぐ？」

美雪と言つのは好きだった子の名前だ

すると友人は顔を青くして黙ってしまった

「?.ビうしたんだよ？」

俺は聞いた

次に友人の言葉を聞いた時
俺はボーッとしていてふと田が覚めた
時のような感じだった

あまりに突拍子すぎて 現実ではない
夢を見ていたかのようだった

でも本当は聞いてすぐに分かつてたんだと思う
ただ 信じたくなかっただけなんだ

「・・え? もう一回言つて?」

「だからあ・・美雪は・・死んだんだ」

「冗談じやない」とはすぐに分かつた
雰囲気もそうだし

なによりこいつは「冗談でウソをつく時に
笑いを隠せない男なのだ

蝉と風が沈黙をよりいつそう引き立てていた

「ど ビリして・・死んだの?」

「え ええと・・自殺だよ」

蝉の声さえも俺の頭の中には入ってこなかつた

俺には想像できなかつた

あの眩しい笑顔が・・

死という残酷な悲劇の舞台に上がるひとつは

「なあ・・カズキ・・明日 美雪の墓参りに行かないか?」

「あ・・ああ・・」

俺たちは無言で帰つた

家に帰つてからはすぐに寝た・・
俺の精神に相当きたみたいた

次の日 俺は友達に暗い挨拶をし、

美雪の墓へとむかつた

墓場に行くといつもあるような形の墓だ

ここに美雪がいる

俺がいつも行く時は会つたこともない無縁の人が中で眠つており、ろうそくをあげるだけだつた

だけどそれは墓参りといつ慣習の下に
やつただけのこと

俺は初めて やすらかに眠つてくれといつ
願いをこめてひつそくをあげた
だけどひつそくを持つ手が震えていた

ひつそくをあげ終わり俺たちはただ立つていた

美雪が自殺・・・・?

びつして・・・・・?

俺は口を開いた

「美雪は・・なんで自殺なんか・・
ばかやひつ・・」

「イジメ・・だよ・・」

「え?」

「俺と美雪が違う高校に行つたのは知つてゐ
よな?」

「ああ・・」

「美雪 そこで水泳部に入つたんだ
あいつは泳ぎがもともとめちゃくちゃ上手くて
もう即レギュラーつて感じだつたんだ。
それが気に入らないつて言つて先輩が美雪を
イジめるようになつてな。」

それでも美雪は水泳が好きだったから続けて、もう先輩達のイジメはどんどんひどくなつてつたらしい・・・・・

「それで・・・どうなつたんだ?」

「美雪は階段から突き落とされて足を骨折水泳ができなくなつたわけだ。それでもイジメはまだつづいて、あることないこと噂されて精神的にも追い詰めたれたんだろうな・・・でも俺が生きてる美雪に最後に会った時 笑つていたよ。

お前も知つてるあの笑顔

でもそれは仮面であつて美雪の中は悲しみで満たされてたんだろうな
で・・・結果が・・・こうだ」

うつそくの煙がもやもやしてゐる墓を見た

「なんてことだ・・・俺は美雪を守つてやれなかつた!!
あんなに好きだった美雪を!!」

長い沈黙が続いた

「あれ・・・もしかして・・・カズキ君?」

と声をかけられた
見覚えがある 確か・・・美雪のお母さん・・・

「そりか・・美雪の墓参りに来てくれたのか
ありがとう・・美雪もきっと喜んでるよ」

「そりだと・・うれしいです」

そう答えた・・

「えつと・・カズキ君 あとで家に来てもらつても
いいかい?」

「はい・・・」

そして美雪の家へと向かつた

「カズキ君 これ・・読んでもらえる?」

日記帳だつた

「七月七日 午前一時
もう私我慢出来ない
大好きな水泳だつてもうできないし、あの
学校に・・私の居場所はもう ない・・
死にたい 私そう思いました
だから今日この日記を最後にこの世を
去ろうと思います。お母さん、お父さん、
今まで育ててくれてありがとうございます。
こんなふがいない娘でごめんね・・
でも一つだけ 心残りがあるの
それは 転校していったカズキ君のこと
私好きだつた。でも告白できずに行つちゃつた

そのこと 後悔してゐる

最後に告白したかつたなあ

でも遠いから会いにいけない

だから 無理なんだ

時の輪廻があるといつのなら

私 あなたのことは忘れず 会いに行きます

それが例え 何百年先であつても

私はその思いを忘れません

じゃあ わような「ひ」

このページに何個も水滴が付いた跡がある
それが何かはすぐに想像できた

そしてどんな思い出これを見たのか・・

そして また新しい水滴の跡ができた

涙が止まらない 止めることができない

守つてやれなかつたことへのふがいなさ

なんか色々な感情がぐちゃぐちゃしていた

「これが美雪の最後の写真だよ」

美雪のお母さんが見せてくれた

最後にあつた時と同じ 晦しい笑顔だった

だけど なんか不思議だった

「？」

懐かしいとは確かに感じた
でもその顔は・・確かに美雪であつて
面影も残つてゐる

だけど大人っぽくなつて
パツと見て少し分からなかつた
髪が長くなつたからつてこともあるだらうけど

でもこの胸のモヤモヤはなんか消えない
もう一度日記を見てふと気付いた

七月七日・・・

まあ七夕の日だった

引き離された男女が唯一会える日が
俺と美雪を引き裂いた日だなんて

美雪が死という決断をした日に俺は
何をしていたんだろう

「・・・・・・・」

思い出した

あの幽靈と出会つた日だった
いそいでもう一度写真を見た

あの幽靈と同じ顔だった

ただ 肌は水泳をやつてる美雪とは違つて
すごく青白かつたし
元気いっぱいだけど なんかそつしてるのも
無理してやつてるみたいだつた

でも笑顔の眩しさは全くいつしょだつた

そういうえば俺があいつに本当に心を開いた
のもあの笑顔を見たからだつた

あの幽靈は美雪だ・・

そして幽靈と別れた日を思い出した

俺は美雪の事を忘れて新しい恋に生きようとした
そういうえばあいつはそれを一生懸命止めようとしてた

美雪は死んでも俺に会いに来たのに・・

俺はそんな思いを知らないで・・

俺は墓場まで走つた

涙で前は全然見えなかつたけど

「じめん…！」

俺は墓場の前でひたすらあやまつた
俺の心とは違い 空は青く 風は緩やか
自然が俺を慰めてくれてたのかな

とまあこんなことがあつたわけだ
俺はまだ美雪のいた土地にいる

今は 夜

何をしているかって？

精霊流しつて言つて死者の魂を弔つて
灯籠を川に流していりんのだよ
お盆の時期だから

きつと君はもう俺の前には現れない
悲しみを背負つたまま天国へ行つてしまつただろうなあ

引越ししてから 美雪として君に会つてなかつたな
あの日さよならつて言つたけど
連続でさよなら だね

そうそう

幽靈として別れた時にお前が最後に言つた言葉
なんか 今ならわかる気がする

「カズ君なんか大嫌い」

かな

普通の言葉に思えるよな

でもこの言葉 昔美雪と喧嘩する時にいつも

言われてたことばなんだ

これを聞いた時はいつも傷ついていたよ

昔から 好きだったんだよ

だからあの時 この言葉を聞き取れていたら

あいつが何処かへ行つてしまふのを引き止めて

いただろう

そのセリフと声を聞くだけでなんか後悔してしまふんだ

そして幽霊が美雪だと分かつてしまつてただろう

光がだんだん小さくなつていく

すぐに消えないといふことは

俺も美雪も別れを惜しんでるんだらうな

時の輪廻か・・

来世で愛し合いたい・・か

そうだな

時がいくら経つても変わらなっこの満月の下で

いつか

(後書き)

初めての作品ですがシリアスに書いてみました。
今回は笑顔というテーマが少しあるんんですけど
それを上手く表現できなかつたのが心残りです。
読んでくれてありがとうございました

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5845d/>

夏の月

2010年11月26日07時17分発行